蝦夷風俗彙纂後編

八

ヲ6
460
18

門ヲ呂6
號460
巻18

蝦夷風俗彙纂後編巻八目次

○雜録下

蝦夷の碑類ゟ和文を用ふる事
有珠嶽噴火の事
蝦夷戸口の事
夕張土人由來の事
イサリムイイサク土人由來の事
西別川論始末の事
鴈鴨の事
千嶋の事

唐太島の事
攝津漁夫蝦夷へ漂流の事
義經蝦夷并滿州へ渡海の事
義經武威の事
義經東察加地方よ到る事
義經事蹟の事
○雜録追加
蝦夷人胡沙吹事
擇捉夷人開化の事
蝦夷人書簡の事

化石の生長する事
飯鳥の事
銭高直の事
群鹿の事
鹿川を渡る事
黒鹿の事
海扇海上往來の事
厚岸蠣島の事
山靈の和人を嫌ふと云事
まじなひの事

鏃石の降といふ事
奇石の事
シユトお故由ある事
猿留新道の記
蝦夷山川の事
蝦夷人の教化をそらる事

蝦夷風俗彙纂後編巻八目次終

蝦夷風俗彙纂後編巻八

○雑録

○蝦夷の碑類ハ和文を用る事

蝦夷地へ立るせべての碑類ハ漢文を用ひざるハ林大學頭乗衡曰今度彼地の舉ハ新ハ本邦の通り處置せしめ給ふ所なれバ和文ハてこそならまほしけれと云ヒ故ハみな和文を以て記ル休明光記

様似字オソフケウシハ建けん碑文を守重ぢ平仮名

もて記せるハ感ぜべし。總て往來等の事ハ。かくあらまほしきなり。然るに其事を土人に話したきバ。土人のいふ。守重（カニカサ）ニシハ。爰元和人字にてむらし立置しゞ故に。松前の役人取捨たるなり。是を土人字に書て建置きたバ。松前領に成しとて取捨べきやハと。よつて其土人字とも何ぞと聞に。片仮名ハ事なるよし答へ り。其故ゝ今に土人ハ名前。まゝ地名等。皆片仮名もて ゝるゝゝバ。東蝦夷日誌

○有珠嶽噴火の事

有珠嶽の燒出せしハ。寛文八年ハ七月十四日にして。

松前近邊までも。震動ゝる事度々にして。十五日ハ大ひにふるひ。雲中に神軍といひて色々ハ音きこえ。煙中に光る物ありて輝きそしる。和人夷人共に是ハ見るもハ多し。又南方にハ海ゝて大に震ひしゝバ。人々大ひに恐怖をおしたりしとぞ。北海隨筆

○蝦夷戸口ハ事

文政壬午野作戸口表

山越内　戸百。七　人口五百。四人　男二百五十一　女二百五十三

虻田　戸百七十六人

有珠　人口八百人　男四百十一　女三百八十九
戸百○三
人口四百十七人　男百七十八　女二百三十九
繪鞆　戸三十六
人口百四十四人　男七十八　女六十六
幌別　戸五十八
人口二百三十一人　男百十　女百二十一
白老　戸七十二
人口三百三十二人　男百五十九　女百七十三
勇拂　戸三百十二

沙流　人口千三百十二人　男六百五十二　女六百六十
戸二百三十二
人口千二百十五人　男六百二十七　女五百八十八
新冠　戸八十一
人口三百五十八人　男百八十四　女百七十四
静内　戸百○四
人口五百二十三人　男二百四十一　女二百八十二
三石　戸五十六
人口二百二十二人　男百○二　女百二十
浦河　戸七十五

人口八百○四人　男三百七十九　女四百二十五
根室　戸二百五十四
人口八百九十一人　男四百四十二　女四百四十九
國後　戸百○六
人口三百四十七人　男百五十九　女百八十八
擇捉　戸八十一
人口八百四十九人　男四百二十　女四百二十九
瀬棚　戸十九
人口八十六人　男四十五　女四十一
太櫓　戸十七

人口三百二十七人　男百四十六　女百八十一
樣似　戸二十三
人口百三十二人　男六十一　女七十一
幌泉　戸三十九
人口百七十三人　男七十四　女九十九
十勝　戸百七十一
人口千○九十九人　男五百二十二　女五百七十七
釧路　戸二百七十七
人口千三百四十九人　男六百五十三　女六百九十六
厚岸　戸百六十四

	人口六十八人	男三十二	女三十六
久遠	戸五		
	人口二十五人	男十	女十四
島牧	戸三十三		
	人口百二十八人	男六十	女六十七
壽都	戸十五		
	人口七十六人	男四十	女三十六
歌棄	戸四十六		
	人口二百〇九人	男百〇六	女百〇三
磯谷	戸二十四		

	人口八十三人	男五十二	女三十一
岩内	戸七十一		
	人口二百五十一人	男百二十一	女百三十
古宇	戸二十九		
	人口百二十八人	男六十六	女六十二
積丹	戸十五		
	人口八十二人	男四十	女四十二
美國	戸十四		
	人口五十四人	男二十八	女二十六
古平	戸七十三		

余市　人口三百七十四人　男二百　女百七十四
戸八十九

忍路　戸七十一　人口五百六十四人　男二百八十三　女二百八十一

高島　戸四十一　人口二百九十二人　男百四十九　女百四十三

小樽内　戸四十三　人口百八十九人　男百〇三　女八十六

石狩　戸三百三十二　人口百五十人　男六十　女八十一九

上川　戸七十五　人口五百二十七人　男五百九十二　女五百六十六

厚田　戸十九　人口七十二人　男二百六十三　女二百六十四

濵益　戸八十四　人口二百九十九人　男三十五　女三十七

増毛　戸八十五　人口四百三十七人　男百五十三　女百四十六

留萌　戸九十九　人口千百五十八人　男二百二十七　女二百十

人口四百七十二人　男二百四十四　女二百二十八
竺前　戸四十八
人口二百十一人　男百〇八　女百〇三
天鹽　戸七十八
人口四百十八人　男二百十五　女二百〇三
利尻　戸二十八
人口百十六人　男五十七　女五十九
宗谷　戸四十九
人口七百十九人　男三百五十三　女三百六十六
紋別　戸二百八十二

斜里　戸三百十六　人口千百三十六人　男五百三十九　女五百九十七
人口千三百二十六人　男六百十二　女七百十四
唐太　戸三百五十七
人口二千五百七十一人　男千二百〇八　女千三百六十三
總計戸四千九百八十四口二万四千二百五十　男一万二千〇六十七　女一万二千百八十三

蝦夷新書

〇タ張土人由來の事

タ張ハ往古より千歳領まて。千歳川筋イヘツフト迄の間。左右ハ川野山とも。千歳土人共自由ハ徘徊致し

候。其頃夕張より。住居の土人も無之。右夕張土人共初
ヨを尋きゞ。元十勝土人にて。なる時古郷カムイ呑共
節。言分の甚惡敷事有之。數多の土人共より憎を受。右
等の事より付。女房土人變死せしめても。此所より住居難
致。依て同所を立去り。沙流領アベツと云村へ相越。頭
役の土人コクワヌと云者の方より。世話より相成居。年月
重り候故。右コクワヌより十勝土人へ申聞候ゝ。古郷
へ再び歸り度存念より有之哉の段相尋候處。同土人の
答より。如何様かる事有之候とも。古郷十勝へ歸る存
念ゝ毛頭無之。何卒此所より永年住居いさし度趣達て

相頼。依之コクワヌより再び申聞候より。左様の心得
より候へば。以來其方義當所土人よりいさし遣し可申と
契約いさし。其後數年相過。コクワヌ風と心付事有之。
右十勝土人へ申聞より。扨其元も當所より永住致し居
候ても。聊差支無之候へども。其元より内談いたしたく
義有之。沙流川上より當て。夕張と云高山有之。其麓より小
川數々有之。尤千歳領より其川々へ鮭澤山より登り候
間。御輕物より相成候鷲獺。其外毛物澤山。殊より土地も至
て宜敷。千歳川へも道近く候間。右の處へ住居を求候
ても。如何より候哉。此段申聞候處。十勝土人の答より。幸

望ハ土地ヨ候間。何卒其所ヘ引移度と願出候ヨ付。夫より支度爲相整。右ダ張川の右手ヨ家を取建候處。兼て承り候通。鮭澤山ゴ有り喰物ヨ相成。又色々ハ草根も澤山ヨ有之。其外山獵ハ便利大ヨ宜敷所ヨ有れバ。何も不自由無之。年月相凌ぎ居候得共。一人ヨても永住難相成。夫より千歳川の下チカヱと云村ハ地理近き故。同村より女房を貰ひ受候處。追々子供三四人も出生有之。右子供等段々成長ヨ隨ひ。兄弟のもハ共不和ヨて中惡敷故。右兄弟ハ内マヲイシユクハイと云處へ。勝手ヨ振分り住居いたし。尤其處も千歳の土人共。夏分ヨ為。畑作致候場所ヨて。年々土人も込合候事故。段々睦敷相成。互ヨ嫁聟等ハ縁類ヨ相成。千歳川ランコウシと云處よりも。彼ハ地へ頭役土人引越永住致し。依之段々土人人別大勢ヨ村々も相殖候得ども。全石狩領の土人ヨ一人も無之。イヘツブトよりシユマラ邊ヨ。石狩土人の居住一軒も無之。段前々より土人ども云傳ヨ候。夫ヨ付申上候義も往古よりタ張山權現様の御像。今ヨ至るまて。千歳川ヨ安置し有之義も。無相違事ヨ御坐候。

○イサリムイサク土人由來の事

ムイサク土人ハ根元ヲ。男土人ヲホロサンの生。女土人ヲ。昔ヲ地名ヒホクシと云て。當時ハ新冠生ヨて。夫婦ヨ相成。沙流ヨ永住致し居候へども。其後ハ沙流山々ヨ鹿獵ヲ無之。畑作等ヲ無之。飯料之敷難澁ヨ付。夫婦ヨて相談致し候ヨヲ。イサリムイサクと云處。夏ヨり秋迄鱒鮭雜魚等澤山ハよしヨ候間。其處へ參り永住いたし候ハヾ。安心ヨ相成可申と夫婦一決致し。夫よりムイサクへ相越。同所ヨ住居いたし候處。追々子供澤山出生成長いたし候後。父母共病死致し候へども。古郷沙流へ歸る事ヲ不相成。其所ヨ永住いたし居。

シリマウカと云者ハ代ヨ相成候節。オサツ村總小使サハシリと云者の姉。モンカランケを遣し。夫婦ヨ致し縁類ヨ相成。ムイサクヨ永住爲致候よし。全千歳土人ヨ相違無之候。其頃石狩土人ヲ一人ヲ住居無之候。其以前鮭鱒引網等ヲ相開け不申由。元來右引網ハ。此ヒホクシより相初ヲ。尤クゴ糸ヨて拵候。小屋小網引立候處。可成の漁事有之。其近邊ヨて。右ハ網拵方相習ひ候て網仕立。夫より石狩川口へヲ。當所の網一統放し。右大川ヨて引立候處。相應ヨ漁事有之。至て便利宜敷候故。まゝ勇拂領ヨてヲ追々相仕立。石狩大川へ持

下ヨリ漁事致候得共。右網ハ元來勇拂より相初ヨリ候事ゆゑ。石狩土人共方ヨリ聊故障無之。勿論イベツブトより川上ハ千歳川筋の義ハ。舊來千歳領ヨリ。土人共をシコツ土人と相唱來候由。春先より夏分までハ。石狩大川通ヨリ小網引立。飯料漁事いたし來。秋ヨリ至り候へ共。小川へ登る鮭を取り。西別へ參り小川々々ハ鮭漁致し。互ヨリ睦敷相凌居候處。其頃色々の品積入候商内小廻船。年々石狩へ川入いたし。土人共と交易致し。夫をイベツブトより上の千歳土人共浦山敷存候とて。右交易の品々。石狩土人へ願入候處。早速承知有之。其頃ハ千歳土人共。矢羽獺皮其外の類澤山ヨリ持合候故ヨリ。石狩土人申ヨリハ。相應ハ世話可致候間。右ハ品々持下り可申と内談有之。夫より段々と相互ヨリ睦敷相成り。石狩土人共イベツブトより上ハ方ヨリ。勝手ヨリ假住居いたし居候由の處。夫成りハ永住のものも有之候由ヨリ候へ共。イベツブトより上ハ。昔より全千歳領ヨリ相違無之。今ヨリ至る迄川筋落口迄。イベツブトと唱來候ハ。正敷証據有之趣。土人共慥成聞傳ヨリ候事。右者後年為心得。勇拂會所より寫取置候。

午三月　　石狩支配人源右衛門

土人由來記　　同通詞　平八

○西別川論始末の事

乍恐以書付奉申上候

一西別川ハ。先年釧路の土人共。右川上より川口迄の處。價差出買請候趣ゟ付。此度御上様御尋ゟ預り奉畏候。依之釧路役土人共より私共へ。右川一條懸合ゟおよび有之候得共。西別川賣買の義も。是迄一向聞及無之。殊ゟ西別川上ハ義も。元來釧路領地の内と相心得。土人住居ゟも可有之哉ゟ奉存候。西別川上ニカルンナイと申所迄。雙方土人共入交ヲ。飯料鮭取罷越候よし是を承り。依之ニカルンナイ。此地境ゟも可有之と奉存候へども。治定相分り兼候ゟ付。乍恐此段奉申上候。以上。

辰十二月　　根室役土人　陳平

厚岸御役所様

乍恐熟談仕候以書付奉願上候

去十二月中。御呼出し相成候處。西別川并堺等の義。蒙御尋候ゟ付。有体奉申上候。猶口書ゟて可奉差上旨被仰渡。則奉差上候處。根室役土人陳平。仁助へ。御

突合ふ相成示談仕候得共長立候者も無之相譯ら
不申歸村被仰付又々今般御呼出ふ相成根室庄屋
四郎左衛門總年寄新右衛門其外前引合はものど
も罷出再度御突合雙方示談仕候樣被仰付候ふ付
猶談判仕候處根室庄屋總年寄申聞候ふゑ賣買の
義ハ存不申候得ども川口より川上迄ゑ釧路領と
相心得申候其譯と申義ゑ四郎左衛門祖父イカシ
ユンテと云もの右川筋通りの後見致呉候ふ付精
一郎祖父ベケレニシより銀細工大刀鞘一本銀盃
六つ相送り川口より川上迄の處後見相頼申候趣

根室庄屋へも申聞候處川賣買の義ハ聢と不相心
得候得ども後見の義右品有之上ゑ相違も無之義
ふ付此廉を以て此度取極め西別川口より川上迄
後日彼是不申趣相渡呉候旨申聞候間慥ふ請取候
積り示談相整申候但地堺の義ゑ往古ホンケネカ
より シカルンナイと取極置候間右樣被仰付被成
下候ハヽ雙方不都合ゑ廉も無之難有仕合ふ奉存
候雙方右熟談相濟候上ゑ以來御上樣へ御苦勞筋
相掛申間敷候依之立合連印仕爲後日熟談書奉差
上候以上

安政四巳年三月廿四日

釧路年寄　小兵衛
同　開一
同總名主　真吉
同總年寄　武助
同庄屋　精一郎
厚岸御役所

右の通通辨奉申上候處。相違無御座候以上。

釧路通詞　三右衛門

乍恐熟談仕候趣以書付奉願上候

一去十二月中御呼出しゟ相成。西別川并境の義。蒙御尋を候處。陳平仁助兩人義ハ。聢と不相心得候ゟ付。歸村の上古老のもの〳〵承合可申旨被仰渡歸村仕候處。今般御呼出ゟ相成。釧路庄屋精一郎總年寄武助。其外前引合の者罷出。再御突合雙方熟談仕候樣。被仰付候ゟ付。談判仕候處。釧路庄屋總年寄申聞候ゟ。川口より川上迄買請候川ハ趣。被申聞候得共。私共不分明ゟ候處。四郎左衛門祖父イカシユンテと云者〳〵。右川筋の義後見被相頼候ゟ付。釧路庄屋祖父ベケレニシより。銀細工太刀鞘一本銀盃六ツ相送ヲ。川口より川上迄後見被相頼候趣。右品の内

太刀鞘ゟ。四郎左衛門弟ハ家ヨ有之。盃ヲ親類陳平方ヨ有之上ゟ。全釧路より出候品ヨて。同斷庄屋申聞候次第相違も無之と奉存候間。川口より川上迄。此度相渡し候樣示談仕。山道堺ハ義ヲ。往古ホンケネカよりシカルンナイ迄ヨ有之候間。右樣ヨ仰渡され候ハヽ。雙方不都合の義も無御座候。熟談相整候上ゟ。以來御上樣へ御苦勞相掛け申間敷候。依之連印仕。熟談書。奉差上候以上。

根室年寄　宅　藏
同　仁　助

安政四巳年三月廿四日

總年寄　陳　平
同　新左衛門
庄屋　四郎左衛門

厚岸御役所樣

右の通通辨奉申上候處。相違無御座候以上

根室通詞　鍼　藏

西別一件書

○鴈鴨の事

鴈鴨ハ。常世國ヨ仮ると云諺を疑ひしヨ。予天明六丙午の夏。得撫島ヨ渉海せしヨ。鴈鴨ハ例年五月頃。此島

邊ゟ歸り住せと。土人の物語なり。予も切觀したり。此嶋より凡二十里許。艮ゟ當りて。新知と云大嶋有り。此嶋ゟ沼有りて鴈鴨住り。是より又艮ゟ當る嶋々より皆鴈鴨出ると云。猶東察加及びオホツカ邊ハ夥しく群集し。夏中ゟ巣を造り。雛を持て哺啜養育せといへり。赤人の國法ゟて。夏中ハ鴈鴨を獵せる事を禁ぜと。雛も漸々成長して。秋も末頃より。亦南方の諸國へ。赴らんとする頃ゟ至りて。獵業を免許あるより。鴈鴨を夥しく捕て。彼國冬中の食粮とする事なり。此說イシユヨサスノスコイ共ゞ物語せり。蝦夷草紙

○千嶋の事

東海得撫島より前路。新知島より東察加地方ゟ至るまで。凡千餘島ゟ丑寅ゟ流る。所謂千島ゟて。蝦夷人之を稱してチユブカと云。チユプカとハ。日出處といふの義ゟり。其嶋の大なるもの十六。小ゟるもの其數を知らず。古昔皆我蝦夷ゟ屬嶋たりしゟ。八十年前正德年中。露西亞人東察加併呑してより。漸々ゟ諸島を蠶食して。三十年前より新知迄を服從して。其嶋々ゟ名を改めて。露西亞ゟ名とゟし。二十年前より夷人の風俗をかへて。露西亞の風俗とゟし。往古より日本ゟ

屬せし蝦夷をして髪を組み帽子を被り股引を用ひ靴を穿ち鉄炮玉薬を與へ露西亞人に言をつらひ露西亞の佛を頸に掛け露西亞より役人並にコウロウイシヤムといふ教法師をして時々諸嶋に至り撫順せしめ其夷人も盡く露西亞に貢を納るゝに至らしめ十年前より得撫島に到りて土着し傲然として去らざるに至る東察加もクルムセに國地にして本我蝦夷の種族なり其地今露西亞北海に要津となる嘆ぜべきにあらずやチユブカ諸島の地理前輩の圖書大抵疎漏少からず天明中最上常矩嘗て得撫島に至り露西亞人イシユヨテケタに邂逅して其大略を得たり然れども未だ詳なる事を得ず寛政十二年守重奉命して擇捉嶋を按察し露西亞の建たる十字の捧杭を倒し同嶋カムイワツカヲイに於て木を立て日本の標とす翌年擇捉嶋を新開し露西亞人に變せる所の風俗を改て本邦の風俗となす時にチユプカ夷人チヤンゲンシ來て投化せイチヤンゲンシもラクヨウ嶋の産なり其子イモンケセツクルも共に本邦の風俗を仰ぎぬ則イチヤンケンシを改て市助と名て市助曾て東察加地方に往來し能く針路を辨し其

嶋嶼湊泊ヒなる所と風順汐路ヒ宜き所を知る。於是守重米を紙上ニ聚て島形を作らしめ語問講究し擇捉の酋長イコトイ及ハツコ。其他ホ〳〵チユプカ諸嶋へ往來經過せる夷人ハウシビクカロクイベツケウシ等と再三討論して初て諸島の形勢詳なる事を得たり。加ふるニ蠻人の說を以てし邦弗加考を作る。

○得撫島（露西亞人改名オトセナツサトイと云）

此島今本邦と露西亞と分界ヒ地とされ。擇捉島カムイワツカクイより得撫島オカイワタヲ迄渡海凡十六七里寅ニ當る。周囲凡七八十里もあるべし。港泊を東邊ニトホ（深凡六尋）西邊ハワニナウニなり。此地古來より擇捉國後根室厚岸四郡の夷人等。露西亞人とも。古來より臘虎獵せし所なり。然ども土着の夷ハどハ。夏秋の間集り漁ヒるのみニして。時として越年ハるものもなり。露西亞人ハ。日本より多く此地ニ越年ヒ。三十年前。露西亞人と蝦夷人と。北嶋ニ於て爭鬪なり。それより後。新知前路ヒ夷人。盡く露西亞の屬となる。寛政七年。露西亞人一時ニ六十人渡來。漸々ニ歸國し。其中ケ子トフシ其外十七人居殘りて。今ニ此嶋ニ在留し女三人なり。生む所の子既ニ七八歳ニ及べ

り。

露西亞人。初め東邊トホム居。今ハ西邊ワニナウヘ移さり。

其産物ハ臘虎を第一とす。夷人ハ臘虎を捕ム。弓ムて射。やすみて突取。露西亞人もサシ網を張り。鉄炮ムて打なり。又ニノと云此腸ウニとなる貝多し。其他海豹鮭鱒ウルツプ

近來名を與へて紅鱒と云。鳴の名もと此魚多きム依て名く。

ゐめ鱒イルカ鯨オキナの類。木ゑ樺榛五葉松イタヤ

シユイニの類。山もカヒヨスフリ。則擇捉より見ゆ。其周囲も。西邊も。オカイウタラより。チブトヨヘツまで一日路。夫よりロツチニまで一日路。それよりウツ子ツブまで一日路。夫よりシンムコまで一日路。合せ四日路。東邊も。オカイワテよりトボ迄一日路。それよりアタツトイまで一日路。夫よりアトイヤまで一日路。合せ三日路ムして盡るなり。但得撫嶋按檢ハ。天明六年官初て。山口某最上常矩を遣し。寛政三年官又最上常矩和田某を遣し。その後松前より一度人を遣し。享和元年官又冨山保高深山某を遣し。倶ム其地ム於て。

露西亞人ハ邂逅セシと云

○ヤンケチリポイ島露西亞人改名ヤムナツサトイ

得撫島より渡海凡二十里。周囲一日路港泊なし。巖石の上へ寄り木を渡して。夷舟を揚置なり。木々一切なし。草のみ生ず。魚も少し。唯エトビリカと云鳥のみ

エトモ嘴ピリカハ美の夷言ハして。此鳥の嘴赤くてうちくしきよりて名く。

夥しく群飛し。手を以て容易ハ捕得べき程なり。夷人此島へ渡ればこの。此鳥をのみ食料とし。其骨を拾て薪とせ。此島ハカムイワツカと云つる泉ありり。岩砂の間よ

り僅一碗ばかづゝ涌出る。色香とも全く辛き酒の如し。久しく酌置けバ甘くなり。其側ハて酒の噂すれバ。忽ハ水涸きて。又別の所へ涌出。酒を釀せし桶を持ち行てハ泉出ずと云。實ハ奇水なり。露西亞人此泉を名てキスウトタと云。

蠻書ハ云。クリルの諸嶋ハ。酒泉を出す嶋なり。蝦夷人來て之を汲て還るものなきとも。海上を經るハ至て。悉く常の水ハ變じるなり。

此酒泉の外ハ水一滴もなし。又カチコロと云鳥なり。大さ燕の如く。羽も白黑なり。之をとれバロより油を

吐出さと。此島も古來擇捉夷人。臘虎獵として渡海さと。

○レブンチリボイ島（レブンと云夷語の沖と云なり）

此島大さヤンケヨ同し臘虎住めり。

○マカンルヽ島（露西亞人改名ヘセウヒ）

此島大さチリボイヨ同じ。臘虎トヾなり。木ふし。夷人此島へ至きバ。ヱトビリカ鳥を捕て食料とねし。其骨を燒て薪とし。此鳥夥しくして。内地の鮭鱒の多ぎ如し。此島も。古來より擇捉夷人の臘虎獵場なり。

○ラッコ島

此島ハ。擇捉島得撫島の東洋ヨ當れり。晴天ヨそ海上遥ヨ見ゆ。此地本クルムセの夷人嶋なりしヨ。近來露西亞ヨ併呑せられ。その風俗も變せり。此嶋ヨ夷人多く住て。露西亞舟ヨも乘り居るなり。露西亞人。得撫島ワニナウより出帆して此島ヨ渡海さ。此島夷人そ皆鼻へ穴を穿ち環を通さ。露西亞の文字を習ひ物を書なり。其夷人名をキモヘイと云もの。得撫島の露西亞人の許ヨ來て。其本國の舟を造る。其製舟トヾの皮ヨて張り。袋の如くヨ拵へ。中ヨそ木を骨ヨ入さ。夷人一人乘りて。袋の口をしめ切り。水のいらざるゆうヨし。

櫂ヨて左右ヘ搔き走り。陸ヘ上れバ骨を去り。皮を疊ミたくなり。此舟を夷人ハトシトチツブと云。露西亞人ハマイタレと云。國後の酋長ツキノエ嘗て云。クルムセの舟を見しことヰり。小船を皮ヨて包み。巾着の口の如ヨして。其口ヘ身を容れ。皮袋ハ口をしめ切り。底ヘ〻石ヨどを入き舟を重くす。いのヨる大浪ヨても鳥の浮ぶが如く。舟も人も波の中ヘくゞ〻入りて。又浮く事自在ヨり。クルムセの人此舟ヨ乘り。沖ヨて鳥を逐を見しが。兩手ヨ〻弓矢を持ち。舟〻櫂を動したり。思ふヨ袋の中ヨ糸ヨどの仕掛ヰりて。足ヨて櫂を動ヰらんと。厚岸酋長イコトイ并イチヤシゲムシ云。クルムセの夷人ハ。トイチセコツチヤカムイの裔ヨり。老夷傳ヘ云。古ヘ夷地トイチセコツチヤカムイと云ものヰり。其身甚短し皆穴居す。夷地開くるヨ從ひ漸々ヨ奥地ヘ入り。遂ヨ其種族相率ひて。筏ヨ乘り。東洋のラッコ嶋ヘ往きて。其部落をヨせりと。又東察加ヨもクルムセの種類ヰり。

○新知島露西亞人改名セムナツサトイ

此嶋〻を得撫ヨりハ少し小なり。レブシチリボイヨり。新知島モヨロヘ渡海ス。

此渡りの汐路を擇捉の渡よりハ弱しと云。ハロンノッの汐ハ強し。

順風を酉を吉とし。順風上泙なれバ。早天ヨチリボイを發し。力を盡して舟を行り。黄昏ヨ新知着船せと云。三十里内外もあるべし。此嶋の前路みな本邦の屬夷ありしヨ。三十年前より露西亞ヨ服從し。それより二十年前以來。夷人悉く露西亞の風俗ヨ變じて。男女とも髪組み帽子を被り。股引靴を着し。佛像を掛。鐵炮を持つ。露西亞役人も時々來るあり。

寛政十年。露西亞の役人。三人此地まで來り越年し。翌年歸國し。本國の頭役替。又金銀吹き直しあるべしとて。知らする爲めヨ來ると云。下略邊要分界圖考

○唐太島の事

蝦夷地宗谷の北ヨあり。海峽を隔る大地を。唐太と稱せ。カラフトを唐人あり。我邦愚俗異邦を汎稱してカラといふ。フトとも北人。ヒトといふ言ハ訛なり。何を以てこの。カラフトと稱せるといふヨ。彼より漢製の諸品を携來るものありて。これを

サンダといふ由。本邦山丹の字を填て通稱とせり。

按ずるヨ近藤氏。邊要分界圖考曰。山丹の部落ハカ

ラフトの奥邊。マンコ大河の河口より。サンタキ子イチヨボツト邊まてゝ居ると云ハ。黑龍江口の北邊より。其江ゝ注ぐ小河なり。堪達河といふ。恐くハ山丹ハ此訛ならんか。又寧古塔ゝ東ゝ堪達山なり。然れば非歟はさして。其正實をあらば。

宗谷の夷人と交易をする事年久し。其齎を所の品物も。所謂ダンギレ。虫の靖。烟管山丹語チユアイの類。種々なり。漸々ゝ遠を本地ゝ傳ふ。これ我夷種とも異ふれる人々持來る故ゝ。江差松前の商賈ども。これをきゝ受て泛然として。カラフトとよぶことゝなり。終ゝ其北夷ゝ地名のゆうゝなきりと見えたり。固より彼地ゝ渡海もせざきば。其涯際を極めば。唯カラフト。々々々々々と稱ゐる事ゝなり來りし事ときこゆ。諸國の地名ゝ此類尤多し。近時開拓の事なりて。二三田點撿の人々をつかはさきしも。未ざその地の限奥を究めをときけり。今茲文化六年己巳秋七月。此地を新さゝ北蝦夷と稱ゐべきの命なり。故ゝ予此編を北夷考證と題をるもこれゝ由るなり。北夷考証

○攝津の漁夫蝦夷へ漂流の事

爰ゝ一つゝ物語なり。むかし攝津國大物の浦ねる。漁

師三人いまゞたの〳〵めゝ船をうちべ。そるゝのみ沖ゝ
網ひきて。ひめもゆ漁すし。世ゝいとなみをあしたゝ
そるゝ。折ふし秋のそゞめ。朝心地よく沖中をこゝよ
かしこよと心ゝ如く乘廻しける。心ゝ残うゞ〳〵き。武
庫山おろしゝ。か〳〵すゝ來るべき雲見えたるもたらぎ
して。唯漁業のみゝおもひ入て働居たりしゝ。播磨の
國書寫山たろしと。一同ゝ吹おろゝ程ゝ。すゝぎこの漁
船の事ゝあれゞ。大海ゝ漂ふ事。一と葉ゝ塵よりゝ猶か
ろくして。吹來る風ゝ先立てうかみ行ほどゝそゝれ。
船中のもゝけども。いつ網を放ちたりそるやゝ覺えゝ。

三人ともゝ小船の底ゝ臥して。兩手ゝ船ぞりゝとり
はきながら。醉たる心地して。腹中の食を吐き。或ゝ鼻
血出て總身ゝびゝすゝ〳〵。今をかぎりとのみ思ひう
ら〳〵ひなゞすゝて行末そのあく。沖中へそらひ出され
そりがくて（中略）夢中ゝ影ゝ如きゝの來ると見えてけ
すゝゞ。甲冑を帶たる人ゝて有そり。船人どゝはひゝめ
なれぬ出立なすゝゞ。夢心地ゝゝ是こそいそゆる軍人
なるべそれど。左右ゝく寄はこのぞして。扱いろなる御
方ゝてゝ〳〵らせたまふぞとうらぐひそきどゝゝさら
ゝ答へ給そぞして。遥ゝかゝへの方へ指さし給ふを

見まバ。犬なる鳥のむらがりて。雲に遊ぶ有さまなりと。
みあ〳〵ちぢしをゆめのとも思ひれ共。尋常の人か
らざる御方に導給ふ。中略一人心き〳〵たるもの。海面に
眼をとけ。北國に住鳥なりて。島ごみといふ鳥なり。此鳥
沖中へ飛行事二十里許に間にて。魚類とるものなり。
ちら〳〵見えたるを。かに鳥にて有べし。ちらバ遠く
とも岸に二十里近くバまさ幸なるべし。櫓櫂を立て。
神力佛力を祈り乘付べしと。沙汰しなる程こそなれ。
三四日の間食せざれども。若きもの共のかゝじけな
さに。ひ〳〵聲して鳥の行方を目當に押行なり。實に

一人の金言に引立られ。もろともに手を合せて漕ほ
どに。霧にまぶかく木草にかゝらに見えなるゆゑ。磯
ぢ〳〵へ押つけうまし。さ餘りて。三人なぐら覺えぬ聲
を立て泣出し。岩に舩をたなぎ。心ちづのに上りて見
まバ。嶮岨の山に出鼻にして。通ふべき道もなく。まさ
方角とても知まざれバ。島ゝ國ゝと疑ひなぐら。岸づ
たひに行方もなく歩行しに。廣き砂原に出たり。いま
だ霧霞深くして。遠く見とほぬ事なりれども。浪打
際に素足にて踏たる跡なり。是に大に氣を得て。其跡
をたゝにて行けるに。一つに住家なり。中略何にしも物

問えんと立寄りて。其内幾さしのぞき見きば。異形の人親子三人居たりけり。日本國にて見なれざる人なきば。少しもたぢたりしらども。かくてそはてぢと戸口によりて少し頭をさげて。ゆるし候へといふ風情をなりそしれれば。そのなるじなるもの。平に坐して兩手を上ていえく。アシンナ。アシリオンガミヤシンガラブツテといふて。その言葉さらに通せぢざなぐらおそろしき風情にもなりらぢして。何りめづらしくもてあそびなりさまなりれきば。さま〳〵にして禮をのべたり。なるじのもけ又いえく。ヤニシイシヒ。オカイタンバ。アシンナアルキヤといひたきども。まづそこのらざきば手にはせにぎる心地して。さらにをりしき事もおく。唯とうえくして立たりしが。連れ内心き〳〵たるものいえく。何やうにもしして。食事は事をまうして。一飯をもとめたきものなきども。別にねぢべき仕方なし。去にても五日以前本國は飯を食せしよりおのかさ船中にて藁をかみたるぞらなれば。兎にも角にもをらえばやと。やがて彼のもの〳〵そぞに寄りて。腹をたゝきを口をたゝきて見せたりけきば。かのなるじも。空腹なるといふ事殘さとりしと見えて。直に立て

鮭は干て有けるを出して。少し火あぶりて引裂て。三人はものへ呉きたり。實は天然の理はして。物いふ事は通ぜざれども。普天の下皆同じき人心なるものやらむとさ〳〵やきなごらそのたまもの〳〵鮭を。少しづつ食せしほどは。其うまき事たとふべきものならじ。大はよろこび禮謝して居たりたきば。ほどなく飯を出しなるを見きば。玄米はて煮たるもはしはして。勿論その器物なしゝは手はて食する事なり。此時一尺有餘はへらの如き物の。はこしそりは有ほり物の有もの を出し。右は手は持て。その飯を入たるもの〳〵うへを。左右へ供し。まさ向ふへ供し。其言葉はオキクルミ〻〻〻〻と三べんとあへたり。此オキクルミといふ言。我國はて源義経公。西海は亂を鎮めたまひしのち。蝦夷國は渡り給ひてより。蝦夷人末は世は至りても。判官殿をオキクルミと。なゞめ奉るよし聞傳へたる事。耳底は残りたりしを思ひ出し。さてそ蝦夷國なるべしと初て心づきたりそりつら〳〵思ひ合きば。四日以前東海の船中はて。夢見さる御姿甲冑といひ。又御もらせの太刀は虎の皮の鞘巻なる御出立。是ぞ此國へ押渡るべき。前表の正夢はてなりそるものなる

べし。實に義經公の今に大靈おはしませる事。凡人は其とぞをもつて申もその恐きをくあこのらぞ。中略終に其夜も心ゆるみて。宵より睡眠をもよふし。いつしか心よく寐入れる。扨何く迷ば。あるじ袖を引きていそく。オマンヤシヤマニシイシヤヒオカイアルキアンといふて出行ゆゑに。何いふ事やらんと見さりゝるに。又立歸りて袖を引く事急なりゝれば。其跡にはきて出て行に。やゝ三里ばかりも行たる頃。向ふに一つの出崎何る所に。家十二三見えてゝきば。かのもは指さしていそく。ネシヤマニ。ヌカル。イクシタオマンアンといふて。ほゝゑみて先にたちて。其家のほりげる所に至りゝる。此所にいさりて見きば。日本船來りて遠淺の沖に。帆を干てあり。まさに日本人出歩行往來をるを。是を見て大に悅びて。かの蝦夷人に先たちて行程に。日本人七八人居さる一つ家に着たり。此もの共も又悅ふ事限りなく。先事はやう是問それた迷ども。胸うちふさがりて答ふる事なさそば。暫しは袖をひたしたりしが。漸々にして物語してゝれば。此ものども不思義に命助のりゝるよと。世にも頼もしくいさそう。我等も仙臺の者なるが。當年秋味

をはみよ來りやゞて出船せべし。其節我等ゞ舟よて
もくるしからぜハ。同船し給ふべしと。かゝぐやくそ
くをかさめ。その日より睦まじく此處よとゞまり。下略

蝦夷見聞誌

○義經蝦夷并滿州へ渡海の事

九郎源判官義經朝臣の。此地へ渡り給ひしことハ。正
史よ殘さるゝとなきをもて。桃太郎ハ鬼ゞ島話と同
やうよ云なす人なり。ゑちさどもつくゞ是を考ふる
よ。實よ源廷尉の神機才略計膽の雙なきゝと。逆櫓の
論。一の谷の英略よつきてもゝらるさバ。疑ふべきよ

ならぜ。高館を落のび給ひて。主從ゑづゝ十餘人よし
て。奥の津輕ハ三馬屋より。今ハ松前の湊ハ。むかし津
輕津といふて。津輕への渡海の津よて有りるゞ。それ
へ渡り給ひ。是よりして此所彼所をさぎて。東部沙流
の邊よさまよひ給ひ。アツマある川さぢへ入て。夷人
ハ家よ滯留ましゝ。此地の酋長どもをかさらひ。再び
西地へ越。今の江差の邊。熊石より大田邊を經て。島牧
歌棄石狩より。北蝦夷へ渡り給ひしよやとたもハる。
蝦夷人朝夕義經朝臣の神機才略ハゝどを尊とゞ。此
所よてハかゝる事ハ有し。彼所よてハゝかゝの事有

しと云傳へ。蝦夷淨瑠理といふもはよも。其大略をのらえし。酒宴は後ハこのあらぶ是を謠ふことなり。扨其故を探索はるよ。源廷尉の此地よ渡り給ひしと云ハ。疑ひもなきことゝしれもそる。先その土人は云傳ふるところの一二をきゝよもるに。奥州津輕領なる三馬屋港ハ。前よもいふ松前へは渡海場よして。纜よ帶水もて。白神岬と對しゝるゞ。此所の海岸よ一つの奇岸ゐり。高さ三丈餘。巾凡五丈。横一丈ぞゐり。上よ古松繁茂したり。此所より先の村々ハみゝ蝦夷人は住よしよて。奇岩怪石重疊として。馬蹄ハ元より人足だ

よも立がさき故よ。自ら乘給ひたる馬と。龜井六郎伊勢は三郎の馬とゐの岩穴よつなぎ。いとあつらしくも。此所を立出。九折數百歩上ゐる山よ登りて。蝦夷地を見やり。首よりけ給ふ一躰の十一面觀世音薩陀の像を。此所は古松は枝よかけて。主從の行末の事を祈りたまふ。こきより藤嶋村算用石村釜の澤村へ到り給ひゝるゞ。此英雄ぞよもゐ嶮岨の苦辛よ堪給ハざりしや。甲を脫て海岸よ投捨。今よ甲石と元宇鋏村よ到り。上宇鋏へ出て龍飛の岬へ到り。此所よて鎧を脫て海岸よ投捨。鎧岩といふゐり大岩の上よ帶ときて。向ふへ游

き渡らんとし給し時よ。今よ帯とき石つゐぎ置給ひいふなり
し馬。そでよ龍馬と化して此所へ飛來り。主從の人を
騎せて。向方は島根をさして飛去りしとぞ。今も此所
を龍馬岬と云しゞ。何時となく馬といふ訓を省きて。
龍飛岬とぞゐまうゝる。扨松前は城下ある阿呼寺ハ。
渡海山と號して。義經朝臣此地へ渡海の時。先清らか
なる地を見定めて。一宇は寺を建立まし〳〵。自らの像
を刻して。上ある山よ納め置給ひしゞ。是もいつゝ形
像の似さるより。將軍地藏の像となし。今よ地藏山と
いふ。まゝ東部沙流の内ある。アツマは酋長の家よゝ。

現よ滞留まし〳〵たりとて。今よその時の事を申傳ふ
るなり。江差の鷗嶋よゝ。六韜三略は巻を隠しだまひ
しといふ岩窟も殘さり。龍馬の蹄石といふものも有。
西地島牧より壽都の間よハ。辨慶の粟畑。ライデン岬
よハ。辨慶の太刀ゝけ石。唐太の白主よハ。義經朝臣の
城跡ゐど〳〵。夷人は口碑よ殘ることゝなり。今ハ義經朝
臣をオキクルミといひ。まゝハ判官さまとも云。辨慶
をシヤマイクルといふて。朝夕尊敬たしこゝる事なし。
只一盃の酒を呑よゝ。先其盃の上よ飲箸といふものゝ
を乗せて。此箸は先よ其酒を少しひさし三度手向。そ

れよりその箸まて髭を撫上て呑ねり。その手向る一滴ハ造島の神。二滴判官さま。三滴目ハ大江戸の神さまへ。手向と云傳へたるゞ。其殊勝實まに恥べきまでなまを有たとなり。蝦夷葉那志

龍馬山觀世音菩薩略縁記。抑當山正觀世音菩薩の由來を尋奉るに。人皇五十二代清和天皇の後胤。九郎判官源義經公の。御兄頼朝公と御中不和まならせ給ひて。後當國へ下り秀衡を頼み。高館の城まに籠り給ひしかとも。終まに落城し。其後難を遁れんゞ爲まに。蝦夷へ渡らんとて。此三馬ゞ浦まに來る。折節波風をげしくて。龍飛の汐起り。海渡るべきようなし。是まによつて義經公。自ら海邊の巖に頂上まに登り端坐して。一心まに觀世音菩薩まに祈誓し奉り。薩埵に威力を以て。蝦夷地へ渡るべしと祈る事三日三夜なり。丹誠まことなりて。神靈なやまるゞ感應ましくて。觀世音菩薩白髮の老翁と變現ましまひ。義經公まに告て曰。汝至誠まに祈る所の願望まによつて忽ちまに成就せ。今汝まに龍馬三疋を與ふるなり。此馬まに乘つて容易く波濤を渡るべしと云々。有難さの餘り歡の泪袂をぬぐり。巖上より下りて海邊へ向へバ。三疋に龍馬浦風まに嘶來る。是をとらへて則

巖岸よつあぐ。此因縁有るよよつて。此里を三馬屋と名付るとなり。其龍馬の蹄の跡。今以て巖上よ歴々として残る。

此蹄跡事を僧よ尋しよ。岩崩塞して分明ならぬと云。

其後ハ龍飛の汐も起らぬ。波風も静りぬ。是よ依て酬徳の爲義經公みづから帯せらるゝ所ハ太刀ハ目貫の金を以御丈一寸餘の正觀音を刻み。巖上よ安置し奉る。夫より船よ乘て。數百騎の軍勢を引卒し。難なく蝦夷地へわたし渡り。蝦夷を切靡け。韃靼へ責入。切取て。爰よ子孫を傳ふると。觀世音より授りし龍馬今以て蝦夷地よ存命して居るとのや。大明國へ責入國主を退けて。南京を静め。唐の國號を清と改る事ハ。義經の末葉清和源氏たるゞ故よ。清ハ字を用ふなりと。日本より南京の系圖を尋させらるゝしのゞ天照神の御末。清和源氏ハ後胤ありと唐土より返翰有しと。（未曾有の記）滿州人よ。源義經蝦夷より滿州へ入し事ハ度々たづ祢しに。聢とせし証據もあらぬ。當時漢土ハ天子も日本人の末なりといふ事承り傳ふと。べごとよ答へたり。思ふよ蝦夷へ行し。我國人の言葉を聞傳へた

るまてもなりけんか。併一の證據ともなるべきも。唐土の地を出離きマンコ川を五十里ぞかりのぼりてオレヒと云し所に青石に錐の様なるものにて彫付し。二足の画なるを見たり。其筆勢いりにも我國に画法にして全く異國の人に筆法にならひ。土人も是ハ日本人の筆ぢよし云つゝ。林藏にも試に書て見よと所望せしのども筆拙くきバとて辭して止ぬ。右ぢ馬の画もしや義經又ハ義經從者ぢ画きしにも有べき歟。蝦夷地に辨慶崎と云所なるを以て証據とせしハ。正しく世人ぢなやまりにて。蝦夷言葉にヘンケルと云言語なり。右の地ハヘンケルサキにして。辨慶にもならじとぞ。窮髮紀譚

○義經武威の事

蝦夷島漂着記に。九郎判官義經公。奥州より彼地へ渡給ひ。神武の德を以て。彼蝦夷共を伏せしめ給ひてより。日本の神武にならびき隨ひ〳〵由云り。千島志料

○義經東察加地方に到る事

東蝦夷地厚岸。ならひに沙流紋別といふ處にあひて。乙名どものもてなしを聞に。むかし源廷尉義經朝臣辨慶の兩將に。沙流の川上なるハイヒラといふ處に

居て。枯木と鷲の嘴とを多くあつめて柵とおし。又下鵡川キロ、井山中へ往來せしゞ。カニケシチカツフといへる。金色の羽の鷲は通りたるを見て。相ともゐたは鷲を追ふて。ポンルヽカは國ゐいたを給ふといふ。

此ポンルヽカ國の事を老夷ゐとへども。いづくといふ知きさをしゞ。チュツカ夷人イチヤンゲムシゐ。カムサズカ地方の事をとひしゐ。カムサズカの海口をとハ。ポンルヽカといひて。蝦夷クルムセの國ゐり。今ハ露西亞人名を改めて。ベストフアビルスゴイといふといつり。こゝゐおひてをゞめてポンルヽカ國の名ハ聞得こゝり。則クルムセを。此島往古のトイチセコツチヤカムイといへる蝦夷人の末裔の夷人なを。續蝦夷草紙

○義經事蹟の事

東蝦夷地沙流といふ處ゐ。源判官義經の社といふ有て祭るよしなり。則強夷オニヒシといふもの〳〵村ハ。則此沙流といふ處より出たりといふ。此處ゐむこしを仙人住て。山中の岩窟ゐこもをて居たりきと北海隨筆

蝦夷人義經の事をオキクルミといふ。辨慶をバその

儘まて唱ふ。義經むつし此國のハイといふ所へ渡り。蝦夷の大將分の娘まちなみて。蝦夷ゞ秘藏の卷物を取さる由を。日本ハ淨瑠理のゆうまりさりつさふるを。蝦夷人の中まて。智恵勝きさるもハ共語る由なり。義經をバ殊の外まゝ崇敬致し。其城跡へも足蹈もせざるよし。右城の石垣まゝ。志りかくと云魚の嘴まて築立〳〵由。右の魚嘴ハ長さハ九尺まて鋏の如く。數百年を經とも折る事なしとあり。右城跡石垣今まゝ存在せ

ず。蝦夷記

矢越岬ハ。白神岬と箱館の間まあり。傳へいふ古昔邪鬼此まゝ住せしまゝあり。舟の往來せる事なかりしゞ。判官矢越射て始て海路開けり。故まゝ今まゝいさるまで。往來ハ船中必岬まゝ向ひて矢を放つを例とせり。

辨慶岬ハ。西蝦夷須築まあり。古昔判官此地より異邦まゝ渡りしと云り。

來年岬ハ。同磯谷まあり。辨慶蝦夷人まゝ來年歸る事を約せし地なりといへり。

カメツボシ岬ハ。同濱益より雄冬泊の間まあり。昔辨慶此峯まゝ住せりさいふ。館野瑞元書まゝ。フヨマイ。同斜里と知床とハ間カムイコタンハ西のこのさまあり。此

所ゐ義經の鯨燒石。鯨逃穴といふものあり。
シノタイハ。東蝦夷勇拂場所エハフより。一里二十七
丁ゐあり。此所方三間ゐ造る義經の社あり。
ハイヒラ山ハ。同佐瑠太より五里十八丁。ピラトリは
西のこゝゐあり。山中義經を祀る古社あり。パイも同
染退(シビナヤリ)より西三里ゐあり。義經の假ゐ住居せし所ゐり。
故ゐ此地ゐある夷人をパイクルとよべり。クルも衆
は儀ゐして尊ふ意ゐり。シヤムシヤインの亂ゐ。此地
の酋長オニヒシ。パイクルは故をもつて。日本人ゐ叛
らぶして。シヤムシヤインと數年鬪爭をゐせしとい

ふ。
蝦夷志ゐ。東部ゐ源廷尉居止の栖あり。パイといふ。
此地の人勇を好む。夷皆是を畏る。夷中稱するとこ
ろのハイクルも。即此地の人をさしていふと見え
たり。蝦夷舊聞
モシリノシケと云所ゐ。ヱトロウフワタラと云岩あ
り。あげ巻の形ゐ似さり。此ゐ因て當嶋をヱトロウフ
と名く。昔しチクルニシヤ。マイクルと云二人の神と
も唱ふべき人。蝦夷地ゐ渡りたるゞ。其人の太刀は銀
ゐ提し緒の形ゐ似さりとて。ヱトロウと云といふ。

エトロウを鼻。フを緒。ワタラを岩と云義なり。此二人を義經と辨慶の兩人ありと云說なれども。詳ならず。蝦夷草紙

ロ蝦夷の方を。粟稗大小豆を作り附相貯へ。粟をモンシロ。稗をヒヤバと唱へ。昔義經朝臣此地へ來り給ひし時。播種をそらまし由申傳へ。已ゐ沙流并鵡川ゐ。義經朝臣の故居とて。夷人幣束を建る所有之云々。此國後島ハ。周廻百里ゐ不過といへども。名山奇石實ゐ天造の妙域。セヽキといへるゐ。海中より温泉沸騰し。クサリチといふを。自然の方石巾六七寸長凡一丈半。

或ハ丈許あるゞ。纍々と相重りて。鎧の草摺のごとく。其傍ゐ男形ゐ石有り。まゝ其傍の山上ゐ。方石長二三尺あるゐ。井幹（イゲタ）を組しもの凡六七有り。平地を右の小石波浪ゐ磨して。龜甲ゐ如く奇々妙々不可言。夷人も。昔源豫州此地へ甲冑を置給ひしゞ。化して石となり。其井幹ハ。熊を畜給ふ所と云傳ふ。不佞ハ孔明魚腹浦八陣石ゐごとく。公旌旗を建給ひしゝ。又六花樣の隊伍を試らまし遺跡ゝとも見し。夫よりイエレシコマ。紫黑の角石。其上頭ハ。種々の形をなせしゞ。二町ぞかゐ程。屏風の如くゐ立並び。海水相映じて如画。オクチ

ツプといふ砂山ハ。夏中穿ハと三尺ゐ迄バ。砂下皆雪ふて。是も源豫州ハ舟化して砂とゐるよし云傳ふ。亦沙流鵡川静内へ罷越。義經の古跡を訪ひしゐ。沙流の川上ハイヒラといふハ。昔判官此山上ゐハイといへる魚吻を立て。則加持祈禱をし。居を構へ給ひし所ゐて。世ゐ判官ハ面大王ハ女ゐ通ぜらきしゐ。大王怒て逐々きバ。長刀を執て櫂とゐし逃去給ふ。今の車櫂を其遺風ゐりといひ傳ふ。此所の夷人ゐ。風俗家居も格別よろしく。パイクルとて。夷中ゐ稱せらきしよし。亦同所より。凡十里餘鵡川の川上。キロルイといへる山上ゐ。判官の來りて魚を釣。幣を立給ひし所とて。今尚其故跡ゐり。又古き甲冑所藏の夷も有り。近藤巡夷録

知床字クシヤラキウレ。ワツカエタラ此邊暗礁多し。一櫂をゐやまさバ。其岩角ゐ打碎きん事を。カモイエバ大岩怪岩頓蛇（トツコカモイ）の頸の如く海ゐ差出。爰ゐ一つハ昔話ハ。辨慶の妹ゐる者。此所ゐ住々るゐ。其を呑んと大蛇ゞ來りしを。辨慶蹈潰しゐたるゞ。化して岩と成しと。其時傍ゐ五柱の神ゞ立て居給ふと見えしゞ。則此五本の岩ゐりとて。今アシキ子シユマ五岩とてゐるゐ。オラウシヨハエト岩岬キヤルマイ石門ゐ。辨慶妹大蛇ゐ追

ハ迯逃來り。此穴より覗居たりしと。其上城オフイ岳。
まさ知床岳とも云り。義經様(オキクルミ)此上ゐて軍勢を集め給
ふ時。烽火立給ひしと。オフイを燒と云言なり。ホロム
イ(大灣)上ゐホロムイ岳。其下ゐホロソウ(大瀧)並てイマニ
ソウレ(立串)岩多と云所ハ柱石重れり。昔義經魚を串ゐ
刺て燒。其殘を捨置きしゑ。石と化せしと云傳ふなり。
まさウカウフ(平濱)といふ所。黑白此小石美しく接り敷
たり。並てエンヨマヲマナイと云小瀧なり。さゝゐ義
經公野宿し給ひし時ゐ。席を投捨たまひし故事ハ。オ
シユンクシエト(元岬)是第五岬なり。チフシケヲロ(岩磯)と
云所ゐて。義經公の船破きしゐ依て號く。チヤラセナ
イ(瀧)オヘケフ(小)川爰ゐて。義經公此舟一垢多く入沉ま
んとせしを漸く汲捨助り給ひしとぞ。知床日誌
御冠崎ハ。汀より四五丁沖ゐオカムイと云て。五六丈
の立岩なり。
俗相傳曰。昔源廷尉蝦夷漂泊の時。ゑの洋ゐ難風ゐ
逢ふ故。自着せる所の烏帽子を脱して。ゑの岩ゐ投
かけ給ひ。不難祈と云々ゑゝ稱せと。
形略佛相の立るゞ如きゐ似たる故。蝦夷人神と祭り
て尊信せ。

その故は蝦夷地上下の百船その崎をよぎる時ハ。酒供洗米及画馬等を奉り。往々海波の横難を祈る と云々。

その間は辯慶一夜、野と云廣野なり。辯慶此地は畠を作りて。四方槐樹陰々として。中は曠野なる事亦一異なり。

クロイロ村。此郷巡見使監察の涯也。則使蝦夷參向此地。遂拜謁。而蝦夷使前奏夷樂。舞蹈終日。蝦夷君間賞也使節頗興嘆。轉賜酒餉。蝦夷性嗜酒。終日飲不知。乃種品の盡夷術總備使覽。所謂百歩發弦穿柳葉。吻披千仞碧波放捕鮮魚矣又有稱諷謡者。音律索々如裂縑氤氳。倡者席上仰倒。而屈左右の臂。拍腋下以合の若。謂唯ハウワンと往々在聞矣。時毎日側の夷流泪頻發感聲。呻唫不息。因問譯士。率義經の蝦夷威伏の途。其德云々。可源廷尉知高館の役蟄蝦夷言の是。雖俗説不可誣。又城府居住の舊家ハし て紙はいくへともなく包て。棟梁の間は收おくもは なり。家人代々云傳ふ。儻誤てその筥を開事ならバ。覿面はして隻眼ちるべしと。子孫は至て敢て開くもの なし。年を經て家人絶して他人移居ひ。ちうも彼の箱を訝て披て見るは。義郎の證文なり。

大豆五斗借用せ時の柳營より辨せべし

武藏守辨慶承之

捧府廳爲重寶今納庫

辨慶崎の酋長。太刀一振家財とせ。さやの内へ米投せるよ。ふ消失せるゞ如し。其の故よ米を喰ふ刀ありとて甚尊信せ。一年喰ふ事三石餘ゐいたる。奇怪ありとて府よめせ事ゐり。夷已む事を得ゞ傳來せ。ゐる沖中よして。船行事能ハざれバ。龍神刀を惜る故ゐり迚。鍔ハ海へ投して。龍神よ祀り。柄ハ山祇よ祭る迚。賜ゐよ空よ投せし故よ。今山中よゐきバ。のゞきかへるべしと北藩風土記

西蝦夷地六条の沼といふ處よ。辨慶崎といふあり。義經北高麗の國へゐ〳〵より渡せしといふ說ハ。さだゐならざる事なり。古き鍬形兜の有し故。義經の兜ゐりとて。崇敬せる事も極め難し。是奥羽よて合戰せ時の落人ども。松前よ渡りて。夷人をゐのざむき。古來英雄の名をかりて。威をふるひし類のものどもゐるべし。北海隨筆

今の濱益ハ。一說よゐアマヽシユケよて。アマヽゐ穀物。シユケ炊くの義なり。昔判官公此處よて飯を炊

ぎ給ひしとも云り。まさ此近傍ヨフトムナイ。小川本名マラブトフンナイといふ處なり。譯て振舞饗應の事也。昔義經公〳〵此所ハ土人。海獺を捕て奉りし處なりと。又增毛ヨカムイチヤン岩壁神の城跡と云。義經公昔山越して。ち〳〵下り給ひし古跡ありとて。土人等木幣を立て祭るあり。まさ增毛字ノツト沙岬の沙地。土人小屋つゞく。此所の人家他とも異ヨして。笹垣以て葺き。至て奇麗あり。西蝦夷日記

津輕一統志卷一ヨ。外の濱邊在所ヨて。夷松前渡海要津也。按ヨ文治年中。伊豫守源義經改義行義顯蒙勅勘。使其追討使頼朝下向奥州。不日責拔衣川高館。剋遁其危難。而津輕之越立野。此所于考其所不得其所夷嶋可遁去。秀衡遺言ヨ任ヨ大門坊云者。因勸而零落義經干斯地。至彼嶋。此處繫馬以來名之其厩跡。殘岩窟存干今。馬三足可立又義經平定夷嶋。而其後入全國。謂全其終。因之夷嶋有千島合七百里といふ義經辨慶龜井等所住以其姓名呼嶋之名。同上

圖書云。學忘貝森介右エ門著述なり ヨ云。圖書集成全部一萬卷。清の世ヨ至て編成せる處ありて。寶曆庚辰清人任繩武なるもの齎來りしと。明和甲申年官庫ヨ納めらるゝしとなり。書中圖書輯なる書百三十卷ありて。清帝の自序

なり。其文に朕姓源義經の裔。其出清和。故號清國と有
由なりと記るを見てより。一度其書をみん事を嘆き
れども。娜嬛の秘書に等しくれば。空しく渴望せるの
み。下略　蝦夷雜書

○雜録追加

○蝦夷人胡沙吹事

日本東北の果に。蝦夷といふ嶋なり。此島の人性情他
國と異にして。其形容も異なり。髮赤く髭を二尺餘の
むして。海老の姿に似さる。此國にていにしへより。和
訓えびせぐたを略して。えびせといふなるよし。松前

より二百里ばかり東の方。厚岸釧路などいふ所まで
も。日本人も常に往來せり。此嶋の人日本人に對し。年
貢の未進。其外何事によらず。理につまりたる時。口
よりコサといふものを吹出しぬ。このコサといふも。
霧煙の如くにして。東西をもらさず。其うちに何處と
もなく。逃失たりと。落葉集

○擇捉夷人開化の事

擇捉島藥取（ミベトロ）の乙名捨六。まさ振別の乙名王藏の如き
も。文化度御領となりし時より。歸化して。已に三代の
孫なり。家居も床疊障子なりて。風俗言語皇國の人に

さしてかたらぬ。惜むべし。女子ハ夷俗なりと。志りれども外國ハ隣きる離嶋の。かく皇國風ようつりたるも。全くその頃わひまで。衣食ハ乏しく。活業も絶々なるをも。近藤守重そじめて此島へ渡り。且高田屋嘉兵衛の商船。航海きるやうハ成々れバ。志〳〵ハ於て衣食を更なり。酒煙草何くきとたらえぬものなく。漁具きへそなえり。夷人此時よりして。豊らハ世をれくるやうハなりたきバ。エンドカモイのいとむかしおく。御恵みの有がさき事を感服なき所ら。髫髪(ウナイ)も取なげ。髭も剃るやうハ成たるあり。當今かの玉藏などの家ハ至るものの。ハきバ。上好の茶を煎て。金米糖松風など。いふものを菓子となき。いらハもシヽヤモをなざむきゝりとぞ。今擇捉ハてうたふ謡(ウタ)ハ。オヤバヤンヤレ。シヨモヤンヤ。イアニバツテキ。シヽヤモダカ。グツトクノホツケ。志の謡き。例年の稼方として。來たりあるもの〳〵漁事果て。又シヤモ地へのぼらんときる時ハ。夷女どものうたふ謡なり。其意ハおとしシヤモ地へわられ行て。來年まさ來るや來らざるやをらきバ。志らしそなさぞこのりゞシヽヤモハきらぬぞ。又外のシヽヤモと称るほどハといふ事なり。されらハ浮薄

の夷女どものうたふ謡なごら。その人情を見るまたる。東蝦夷夜話

○蝦夷人書簡の事

唐太島の夷人。名をツヽポリンゲといふもの。片假字を書覺えさり。宗谷の番人某方へおくりたる。夷語の書簡ありり。其文左の如し。

ヤイカタノ。アンコロカイキ。イトイル。イルレンワ。エンコレワン。おれを譯をるる。御無心なごら。研石をかし給えれ。といふ事なり。庚戌雜綴

○化石の生長をる事

土人の傳ふ。太古後方羊蹄（シリベシ）の神。六の白老（シラオイ）のカモイクシといふ所ふ來り。日暮へる故。さし給ふ櫛をぬきて。それふ火をともし。其明るまて濱邊ふ下り給ひし。その櫛燃て炭となりて。今石ふ化したるゞ。追々生長して山ふなりと云ふ。所謂荒唐の言とたもへども。後方羊蹄ハ女神なまゝ。櫛ふ由し有。其說ふ似さる古傳を。古事記日本紀ふも見へさまどもこと長をれバ略を。石の生長したりといふを。和漢ふ例少ゝらゞ。宗谷字ノツシヤフのトウヘンナイの神岩（カモイシユマ）唐太クシユンコタンの岩神（シユマカモイ）等あり。又西陽雜俎ふ。有漁子下網舉之。有

石如拳。石遂長生已經年重四十餘斤。下略　東蝦夷日記

○飯鳥の事

夕張シコツ邊みてハ。虎杖の實を虎杖米（クツタラアマ、）といひ。酸摸（シユナバ）もシユナハアマヽと云て。飯ゑ炊き喰ふなり。土人ハ如此こと研窮して。雀の喰ふものゑ。何ゑても糧ゑ用ゆと。依て雀を飯鳥（アマ、チカブ）といつゑ。納紗布日誌

○銭錢高直の事

東蝦夷地御用地となりて。交易の會所等へ。御勘定御徒目付表火の番等。帳面を扣へ。木綿針煙管小刀等。是迄ゑ時の商人の仕來りし事ゑて。草鞋の類ゑ至るまで。十露盤を取て精密ゑ書留る事なり。具足ゑ持鎗ゑ突せる。役人のゑる事ゑてゑ。却て御威光ゑ輕くなるゑ付。永續の治りりゑ。ちいりぶと。心痛むる事なり。然るゑ銭錢通用ゑじまゑて。賣出ハ金壹分ゑ一貫二百文。買上ゑ一貫四百文なり。元來此錢の御仕入ゑ。一貫六百文餘なり。ゑりゑバ金三分ゑ。壹兩なる事ゑて。日本國中錢の相場。是ゑど高直なる事ハきりざるなり。南部津輕邊より雇ゑれたる大工木挽どゑ。路用ゑ持行たる金一兩ゑ。三分の代りとなる。一日銀四匁の賃ゑ定めゑる者ゑ。三匁ゑ當るなり。酒煙草類安直なる

やうなれども積りては高直なりと雇ども存の外渡世
ゐも成がたしと訇るを蝦夷人まで聞傳へて交易御
直捌ハ高利をとるものゐ思ひたる樣ゐなり御威光
を薄くせる事ゐて甚口惜きことなり。最上常矩厚岸亂申上

○群鹿の事

西ゑ沙流東ハ静内北ビボク南大洋を眺め目ゐ障る
ものなし遥向ふゐ三丁許りの間一面赤くみゆる故
ゐ彼ゑ何ぞと問ふ間ゐ土人弓箭を握り走りて追行其
音ゐ今一面赤く草の枯たるゐと見えし處八方ゐ散
亂せるハ鹿の群集りしなり其かぞ萬を以て算ふべ

しと思ふる土人の言ゐ熊ハ好て陰森たる木立ゐ住
み鹿ゑ好て明き所ゐ住と是熊をおそるゝなるべし
東蝦夷日記

○鹿川を渡る事

西蝦夷地石狩川の南の山ゐをめる鹿ハ秋八九月の
頃其川を渡りて東蝦夷地シコツといふ所の山ゐ行
是ゑ西地ハ雪深く食物なき故東地へ移るなり其時
夷人共船ゐ乘石狩川の川端ゐ笹草など生茂りたる
下ゐ船をつけ岸より川中へ横ゐ柱を三本ゐどさし
かけ夫ゐ葭簀を掛其下ゐ船を入隠きて待居れバ鹿

川へ飛込向ふへ渡る所を船乗出し川中にて追付打殺せなり。熊渡るときハかまをば右シコツへ渡りし鹿春ハなきバ又川をまさりてもとの場所ハ歸るなり。夷諺俗話

○黒鹿の事

十勝神岳の邊ハ黒毛の鹿ばかりと。土人これを神の使もしめと云ひ。ろれども皆獵しとる故。土人ハ是を詰るハ。此山の神々此鹿を多く養ひたきて。土人の我々ゞ食糧ハ何ゝ給ふなりと。自分勝手をいふもをのし。東蝦夷日誌

○海扇海上往來の事

西部中歌といふ所ハて。ある年の冬の事なりしゞ。快晴の時。澳の方より。海上一面ハ漣のよる如く。數多の海扇ゞ蓋を帆として走り來り。最早岸三四丁とおもふ邊りハて海底ハ沉む。それハ是ハして。爰ハ帆立貝漁を始めしハ。日々大漁をなし々るなり。脇乙名ムネトクの話ハ。余子供の時此所ハ帆立貝多く有しゞ。一日快晴の時。蓋を帆として。奥尻島の方へ行。其後一つの貝もなくりしゞ。又此所ハ如此來るゝと云るハ。其後奥尻島の貝ハなくなりしと聞ク。西蝦夷日記

○厚岸蠣島の事

東部厚岸の土人酒六いふ。凡蝦夷人の常食を魚獸なきとも。嚴冬の水を氷りる山も雪積りて。山海の獵なし得ざる時。殆食料ゑ差支る事間々ありさやうなる時ハ。厚岸ゑ蠣島ゆりて。永世盡る事なくれバ。食料ゑ乏しからぜ心安く今日をたくきゑ。已ゑ酒六ゞ祖父まで。釧路の土人なりしゞ。飢饉ゑゆひて此厚岸へ來り住み。餓死を免きたりとさてこの蠣島ハ實ゑ廣大ゑして厚岸入江のたゞ中ゑ簇々として築立さるゞ如し。此蠣も其形他ゑ異ゑして。殼の幅二寸許り。長さ一尺一二寸ゑ至るゑ。肉も僅ゑ四寸ゑたらぬとうて火ゑ炙り食きるゑ。其味ひ最美なり。東蝦夷夜話

○山靈の和人を嫌ふと云事

釧路ゑゆ斜里へ行山中ゑ。ワツカオヒといふ所ゆゆ。此所も何樣なる快晴ゑても。和人だゑ通きバ。雨降ゑしきけるを疑ひしゑ。余ハ三度通行して。三度とも雨ゑ逢しゞ奇と謂べきなり。土人の言ゑ。此所の山靈ハ。和人ゞ嫌ひなりと云傳ふるゑし。通行舍の少し上ゑ。斜里川の源とて。水の湧所ゆるなゆ。久摺日誌

○まじなひの事

奥州半田より御雇銀山方大工頭取代六といふ者昔前字ハボロの金山見分の時濱邊にて蝮に足を喰付きたる夫より痛み強くして股まで大に腫き歩行成がさくなやみしなり此時夷人ども云毒蛇にくまれたる時もたのゞ仲間にてまじなひをなせに喰きたる者を別家におき蓮を取て七ケ所にて焚き夫にて治たゝまで通るわど七ケ所にて度々治たゝめ全快まで別家にさし置よしかくされバきをめて快氣なりとあり蛇の事を夷言トソコカモイと云夷諺俗話

○鏃石の降といふ事

十勝字メモロフトにて召連たる土人鏃石三枚を持來り此石昨夜の白雨に降たりと云て我に與へる故夫ハ何處ぞと問ふに上なるチャシコツに在しと云まゝにそこに行て探しやるに又三枚と小き雷斧一枚を得たり其故を問ふに總て蝦夷にてハ大雨の降し後ハ此石のふるよし答へぬさて此石ゞ降といふ事ハ此地も内地も異らざる事なり其因をいもゝ元慶八年六月廿八日出羽國秋田城雷雨晦日雨石鏃廿三枚云々まゝ仁和元年六月廿一日出羽國秋田城中及飽海郡神社邊雨石鏃三代實録とふるにてもたらる此

品總て雨後得る所ハ雨ゐて土をあらひ流し叩出せしを降しもせと誤て傳へしなり東蝦夷日誌

○奇石の事

蝦夷地ゐハ珍奇なる小石なり空螺貝の石ゐ化したる多しまゝ蜆蛤帆立貝雲丹貝海老の石ゐなりさるなり或ハ半ハ石と化り半ハいまゞ木なるも有此外種々たゞし サシナイと云所の道傍ゐカムイシマといふ石なり黒き色ゐて横ゐ白く蛇の紋有石なり是ゐ足をふるれバ即死ハといひて蝦夷人も大ゐ恐るゝなり夷諺俗話

○シユトゐ故由なる事

此邊の夷家ゐハ種々のシユトを掛さり それゞ中ゐもアカンシユトハ形ち算盤の粒を連串ゐさる如し是第一嚴罪の者を打ゐしなり何ゐも堅木ゐて作れり古とゐ古きハ猫頭刺を用ひたり仍てヒイラキを夷言シユトといふゐし シユトゐ作る木なれバ ゐろ號しなり内地のヒラキの語ハヒラ々々キの略ゐヒラ々と刺ハ故ゐ號け始めしゐ抑此木を以て人打棒を作る事ハ太古よりの故事と思へる古事記ゐ杜谷樹ハ尋鋒と云有又加茂祭の時檢非違使の下部ゞ

持ち杜谷樹八尋鋒なる必シユトの事ハ古風の遺れるものと思ふなり。納紗布日誌

○猿留新道の記

昔近藤守重ぶ猿留の新道を開きてより東部の往來も安らけく成たきバ其功業を記し板ゑ鐫て十勝の神社ゑ納めたり其文ゑ曰。

蝦夷東北之徼自射麻兒至尾朗渉海岸之嶮若鞆筑子鼠内巉巖絶壁登降趦趄蟹歩螺躍蟻附猿攀誤失一歩則齏粉必魚腹夷族死此嶮間亦有之江戸輶軒使近藤君一經此嶮有意新開道於山後恵登呂府安歸之日風雨阻道路塞濡滞數日於是慨然發憤與通詞某及夷族商議出資散財自留邊志別溯水至神芟留按針南沿流而至鏑田奴月登降凡三里而近伐木架流爲橋碎石投谷爲梯行路初完跋渉無危人夷頼之是所以江戸餘沢波及夷族近藤君思人思夷陰徳也余與其事記姓名揭刀勝神祠大日本寛政十年戊午十一朔庚申江戸輶軒使近藤君重藏從者下野源助録

通詞　豐吉
孫　七

○蝦夷山川の事

蝦夷國は山川土石草木とも異なるゆゑバ。人物禽獸虫貝の類までもことゞく其象たゞひゝりて。尤其名も別なり。そのゆゑらましを録して。記臆のかたりとゝ。所謂八種の傳ゆゑ。

一雲頭峻は寒地の山にして火氣ゆゝりがるゞ故に温泉涌出る事有。金銀氣ゆる山形なり。

一柴頭峻は暖地の山にして。其中段より上ハ木なし。

むかくハ大山なり。

一柴体峻は暖地の山にて金銀氣ゆる山形あり。

一亂柴峻は暖地の山にて銅鉄氣ゆる山形あり。

一荷葉峻は暖地にて。木草多し。草樹ゆゑ。

一披麻峻は寒地の山にして。木せくなし。多くハ赤土なり。此形の山は。水せくなし。

一大斧劈は岩山にて木むゆし。水清らゝにして麓に大河ゆゑ。

一小斧劈は岩山にて木少し。水晶の氣ゆる事有。以上八種の山に見様心得て。何國にても試むべし。まゝ

川は五種の別あり。其大概所謂
砂川。此川上大山より出て草木多し。岩山なるべし。
石川。此川上小山より出て深山あらぶ。
泥川。是平原廣野いさつて暖地の川なり。
水色青。多く寒地の濕氣の地より出る。
水色白。多く暖地の濕氣なき地より出る。

蝦夷見聞誌

○蝦夷人の教化をなる事

北地危言に。松前主累世此土に恩威を敷。遠近の夷人
をカモイ殿と尊崇し。たまゝ拜謁の事ありても。恐れ
て姿を仰ぎ見るのみにて無之程に服し居。且家士の采
地になる夷人共。大に是を尊び尊卑禮を正し。家士も
年々采地へ行。夷人どもも來り宿しなどして。親しみも
深き故。新に意を結びてをるまでもなく。何にてもか
ゆうゝと教へさとをに隨て。早く會得をべし。是第一
の安きに御坐候。扨また蝦夷の大欲は。口腹にあるも
にて。其中に米酒煙草を專ら嗜み申候ゆゑに。一年
中漁獵をる處は。各自家に用る外を。悉く米酒煙草或
も諸道具衣服に交易いたし候。今諸具衣服も赤夷に
う來るべけれども。米酒煙草も彼國にをしき處なれ

で。其事共にてらかじめ申聞せ。松前よりの令よそむき。赤夷等相親み。又そ彼國は邪法を。尊信さるものにてらで。此後絶て米酒煙草の類を。送り遣さべからぎとならだ。是のみよりても蝦夷ども碎易いさし。堅く赤夷よ近寄申間敷候。是其大欲よ從て。いましめは行れ安きよ御坐候。蝦夷の愚直なる其風をなし。何よりても已ぐ力よ及び難き事よ。感服仕るもはなら。日月は運動して晝夜にるぐ如き。元より蝦夷等ぐ思慮よにのさそざる事なきだ。深く恐れ敬ひ。其外あやしきことにのれで。カモイはもざなりとして慎めるよし。是よ教るよそ。日月神を主として。幽冥中よ託して。本邦の開闢以來。有ぐたき事實を主と申聞せて。蝦夷も外人ならぬよし共以て。導くべきのやさ紀如此。此三の施しやさき方御坐候間。我より手ぞやよいたし候よ於ぞ。蝦夷も國民よ替る事なし。

大日本の屬たる。小日本も出來可申ぞらりは。難易利害損益にのきらなる事よ。うろ〳〵と打捨置候内。赤蝦夷より教化し來り。彼等ぐ本國城郭の壯麗なる事ども申聞せ。日本ハ物は數ならぎなど申ふらし候ハ〳〵。自ら赤夷の強大よ驚怖し。兇角さる内赤夷よ慫慂せ

ら迯て。蝦夷等彼より先だつて。亂を起さむ事を計りたるかさく候。蝦夷は性愚直なるものゝして。黠智深く殘忍なる事。女夷と雖も替る事なし。先年國後亂の節も。專ら女夷共相手傳。人を切ころぞく事。魚肉をさくゞ如くゝ存。一點のたのびざるの情も見えぞ。却て此亂ぞたらで。其地へ參り候ものなどゝ。女夷途中ゝて行逢候ても。さゝらぬ體ゝもてなしおびき入。男夷とそのりて共ゝ是を殺せその類。聞え申候。此等ぞ以て見るゝ。動亂等ゝそ。男女老少不殘一統して。相働可申候。如此ものどもぞらへゝ。赤夷の強大なる是ゞ據處となりて。亂ぞ起し候ハゞ。米酒煙草ぞ類。至極相嗜もぞなゞら。是を以て命ぞはぐぞ食とそ致し來らぞ候間。左樣ぞ節ゝ送り不遣候共。兵粮責と申事ゝそ至り申まじく。赤夷と食ぞ同くぞる上ゝ。風雨雪中ゝ露頭單衣ゝて。山野ゝ宿居候もの故。一旦人ぞ物と相成候上そ。いろむとも致し樣なき事ゝ存られ候。乍去今の內是ぞ教化致候ハゞ。力を勞せぞして。國民とひとしきとぞ。相成可申候。千嶋志料

蝦夷風俗彙纂後編巻八終